



私の研究生生活 : 連載第1回 ~ 熱い想いで駆け抜けた大学院生活 ~

著者	藤井 功, 平松 寿恵
雑誌名	同志社政策科学研究
巻	10
号	2
ページ	209-213
発行年	2008-12-20
権利	同志社大学大学院総合政策科学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011587

私の研究生生活

—連載第1回—

京都府 宇治市職員 藤井 功さん

～熱い想いで駆け抜けた大学院生活～

インタビュアー 平松 寿恵 (博士前期課程 2008年度生)



地方公務員を目指したきっかけ

【平松】毎回、同志社大学大学院総合政策科学研究科関係者のお仕事についてレポートしてきた、「総政人の巧」に代わりまして、今回から「私の研究生生活」がスタートいたします。同志社大学総合政策科学研究科関係者が自らの研究にどのように取り組んでいったのかをレポートするものです。初回は、京都府宇治市で職員として活躍なされている、藤井功さんです。藤井さんは社会人大学院生として、また、総合政策科学研究科1期生として入学され、修士課程から博

士後期課程まで公共政策コースに在籍され、真山達志先生の下で現在でも研究を続けておられます。はじめに、なぜ公務員になろうと思われたのかお伺いしてもよろしいですか。

【藤井】私が地方公務員になろうと思ったのは、幼いころに、父親が実際に裁判を起こしたことが影響していると思います。私は裁判所の職員なんて冷たい人なのだろうと思っていたのですが、父は、裁判官の方はとても親切で、優しい人だと言っていました。子供心に人に優しくして人のために働けることがとてもいいなと思いました。それが地方公務員を目指したきっかけ

です。また、学部生の時は法学部に在籍しており、司法試験に挑戦しようと考えていました。そこで、公務員になれば司法試験の勉強も両立できるのではないかと思い、公務員試験を受験し、縁あって宇治市の職員として働けることとなりました。今思い返すと不純な動機でしたね。しかし、宇治市の職員として仕事に専念する中で、「自治って何だろうか、自治が実際に存在するのだろうか。」といったことを考えるようになっていきました。私たちが就職したころは3割自治とよく言われていて、財源が3割なのに7割の仕事をしなければならなかった。実際の自治としては3割しかない、自治体としてこのままでよいのかと。そこで、職員の中で自主的に研究会を開いて勉強していました。

自分の想いを伝えたい。それだけで頑張れた。

【平松】 そうだったんですね。それでは、なぜ総合政策科学研究科に進学しようと思われたのですか。

【藤井】 40代半ばに教育委員会の中で、社会教育の仕事をしていて、生涯教育、生涯学習ということが真剣に考えられるようになってきたのです。

1つは、当時の文部省の生涯学習政策が本来の生涯教育・生涯学習概念からずれているのではないかと思えてきたのです。本来、生涯学習はユネスコが言い出したものであり、住民自治に役立つものであったはずなのです。自分たちの意思を自分たちの力で決定していけること、自己決定の力のことであるはずなのです。それなのに日本はあまりにも余暇と教養に傾いてしまっている。政策という観点から、生涯学習、文部省や教育委員会、教育機関のあり方を検討しなければならない。また、この中で自分も学びの世界を踏み出そうと考えました。

2つは、自治体の行政組織において、どの部署にいても自治体職員たちは、自己の業務やその課題を検討したり、分析したりすることをほとんどしていませんでした。当時は地方分権改革の前でしたので、機関委任事務がまだ残っており、国がブレーンで自治体がまさに手足となっているという感じがしました。ここで、地域社会において社会的、公益的課題を自立的に

考える自治体になっていくべきだと考え、自治体行政さらに地方自治を自ら考え、意思を持ち、自分たちで運営していく力をつけるために、学ぶことを選択しました。また、職員同士での研究会をもっと発展させたいという想いもありました。

3つは、総合政策科学研究科でならば、自由に意見を言えることです。行政組織の中で、自分の想いや主張を述べると、上司からは、「国の方針と違うから無理だ」と言われて終わりますが、ここでなら論文として自分の想いを伝えることができます。私の職場の後輩も現在、総合政策科学研究科に在籍していますが、彼にも私は、「自分の想いを伝えるのだから、論文はラブレターだ!」と言って応援しています。

【平松】 藤井さんは総合政策科学研究科1期生ということですが、当時の大学院の雰囲気や印象深い出来事、思い出話を聞かせてください。

【藤井】 そうですね、1期生ということで、先輩方がいないという不安よりもむしろ「自分たちが作るんだ!線路を敷いていくんだ!」という熱い想いをを持った仲間が多かったですね。院生会や同窓会総政会の立ち上げなどを通じて帰属意識も高まっていきました。

【平松】 修士課程の2年間はどのような毎日でしたか。

【藤井】 土曜日は半日から丸1日授業。平日は、週に3日間くらい午後5時で仕事を切り上げて大学へ行きました。自転車で駅の駐輪場へ行き、電車に飛び乗り、6時25分からの授業に滑り込んでいました。そこから2コマくらい授業を受けて、その後でゼミの仲間や問題関心の同じ院生とラーメン屋や喫茶店、居酒屋へ行きました。それから帰宅すると12時近くになってしまいます。でも翌日には仕事があるわけです。はじめから「職場には迷惑をかけない。勉強と仕事と両立させる。」ということを決めていたので、眠くとも仕事にはきちんと行きました。では、いつ本を読んでレジュメを作成するのか。基本的には大学の授業がない時に部屋に閉じこもって作るのですが、それだけではなかなか間に合わなくて、12時前後に帰宅した後に徹夜で取り組むことが多かったですね。レジュメを作成して、4時か5時頃に2時間ほど眠って、仕事に行って、また大学へ通う。確かに大

変でしたが、問題関心があること、楽しい緊張感があること、学んでいる充実感があることで毎日頑張れました。私は、少し重荷がある時の方が人間は努力して、頑張ろうとするものだと思います。好条件が整えられた時、例えば綺麗な勉強部屋があって、快適なクーラーがあって、「さあ、勉強しなさい。」と言われたって、勉強しませんよ。なかなか勉強できない条件の時の方が人間は勉強しようと思うものです。私は職場の後輩にも同じことを言っています。

【平松】仲間同士での勉強会などもされたのですか。

【藤井】はい。当時は、先生が指導してくださる通常のゼミに加えて、学生3名と社会人3名で「影ゼミ」を結成して自主的に学びました。同じゼミのメンバーが集まって、あらかじめ本を読んできて、内容を発表し、議論するというものです。私の影ゼミでは財政学と行政学について主に勉強していました。修士論文の発表の練習もみんなで行いました。お互いに時間を計ったりしました。この時の仲間は今でも交流がある私の貴重な財産となっています。

【平松】博士後期課程での研究生活はどのようなものでしたか。

【藤井】私がM2の時に博士後期課程ができることになりました。博士後期課程に進学しようと思ったのは、修士論文を書いたってまだ完全燃焼していない、まだ語り足りないという想いがあったからです。博士後期課程に進んだからといって、自分の想いを語り尽くすことはできるものではありませんから、論文はずっと書き続けなければならないと思っています。後期課程での研究生活は、形式的には個別指導を受けるだけですが、真山先生は後期課程院生での研究会の指導をしてくださりました。そこでは、自己研究の進捗に従い報告を実施し、議論がなされました。議論の内容によっては、「そんな意味がないのではないか」という厳しい批判やコメントが飛び出すこともありました。仲間内だからということで、発表者に対して「まあ、よく頑張ったね」で済ますこともよくあると思いますが、私たちは仲間内だからこそシビアな意見も言い合いました。また、そのほうが面白かったですね。白熱した議論を真山先生が優しく総括し、有益なアドバイスをくださいました。私にとってはとても良い環境でした。よく、研究

発表をした時に先生や同じ分野の研究者などに叩かれることがありますよね、私は研究者を目指すのでしたら、叩かれなければ一人前にはなれない、叩かれ上手にならないといけないと思います。そういった意味ではシビアなことを言い合える場というのは必要なことかなと思います。

また、後期課程では、真山先生と後期課程院生4人での共同研究にも取り組みました。「地方政府の行政改革とガバナンス・イメージ」というテーマで、総合政策科学研究科の紀要に載りました。その後、私は退学したのですが、今でも研究会には引き続き参加しています。現在、生活保護の仕事を担当しているのですが、業務にかかわり「シビルミニマムとしての生活保護」という論文を自治体学会で出しました。これは研究会での議論がベースとなっています。今は行政職員の研修についての論文を用意しています。今年の5月には公共政策学会関西支部の研究会でも報告しました。先ほども言いましたが、熱い想いがある間は論文をずっと書き続けたいと思っています。

【平松】仕事との係わりから、論文を書かれたということでしたが、宇治市役所での藤井さんのお仕事やその中からどのように論文を書かれたのか聞かせてください。

【藤井】私はいろいろな仕事を経験してきました。はじめは納税、次に広報、消費生活、教育委員会、そして現在は生活保護行政を担当しています。貧困や格差という文字を多く見かけます。権利である生活保護が受けられずに、死に至ったという報道もありました。現場のストリートレベルで働いています。実際に生活保護を受けておられる方のお宅に伺って、生活状況の確認をしたり、困っていることがないか、不正がないか調べたりします。デスクワークでは、相談がくれば相談者の実情を聞いて、申請を受理し、生活保護の対象になるかならないかの判定をするといったことをしています。外回りとデスクワークが大体半分くらいですね。毎日いろいろな人生、しかも並でない人生と係わっています。母子家庭、母子家庭といいながら男性がいる、精神病疾患の世帯、元やくざの世帯、高齢単身世帯で死亡後遺骨を子供たちが引き取らないなど、本当に様々な人生があることを知ります。そのような日々の中から疑問が出てき

たのです。北九州市でも生活保護の申請ができなくて、おにぎりが食べたいと書き残して、餓死してしまった事件がありました。行政の組織の中に問題はないのだろうかと思えるのです。北九州市の行政組織だけでなく、自分たちにフィードバックしてみると自分たちにも問題がないことはないと思います。生活保護制度そのものが持っている問題だけではなく、行政組織が抱えている問題もあると思います。生活保護行政における職員の資質も重要になります。そういった関心の中から、私は、福祉職員の研修について考えるようになりました。人に対する洞察力をもっと養っていかなければならないと。研修というどのようなことをイメージされますか。仕事の段取りや礼儀作法について教えてもらうことを思い浮かべる人が多いと思います。それは研修ではないと思います。単なる仕事の説明に過ぎないと。行政学の分野でも、組織論学の分野でも、on the job training が重要であることは言われています。しかし、現状はon the job training になっていません。一方的な講義形式で研修をして、仕事の知識だけ身につける形になっています。当然、現場では上手いきません。ところがon the job trainingらしいことは行っています。例えば、新人の教育ということになると、なんら体系図もないのに「1年かけて、この新人を一人前にしてやってほしい」と上司から言われます。どこまでのレベル

に到達させて、それを誰が評価するのか分からないので、でたらめな教育になってしまいます。私たちの組織では今年から、新人の研修の方法を変えていこうとしています。私は、行政学者で東大名誉教授の大森彌先生のおっしゃるように、研修というのは研究と修養だと思えます。仕事の説明というのは事実を述べているだけであって、研究ではないのです。研究とはどうしていいか分からないこと、なぜか分からないこと、今まで分からなかったことを明らかにする作業なのです。難しく考えなくてもいいです。例えば、自分の家から駅までの近道を探すことだって研究です。探し方はいろいろあります。論理的に探すこともできますし、実際に歩く方法もあります。そんな中で、今まで知らなかった近道が出てきたら、それは研究の成果、明らかになったことでしょう。私は、仕事でも今まで知らなかったことを発見することが研究だと考えていますし、それは家から最寄り駅までの近道を発見するように発見していくものだと思います。いきなり新しいことを発見するのも、もちろんすばらしいことです。そこからさらによくしていこうとすることもできますし。これまで研究について述べてきましたが、修養も大切です。人間としての品性、品格、人に対する思いやりは修養から得られます。北九州市の事件でも、保護申請に来ている人が騙しに来ているのか、本当に困って来ているのか見分ける能



藤井 功（ふじい いさお） 1949年生まれ。大阪府大阪市出身。同志社大学院総合政策科学研究科修士課程修了（1995年度生）。研究テーマは「政策形成過程における市民と行政の協働関係」。

～コラム ハリス理化学館～

国指定の重要文化財。理科教育をめざした新島襄の情熱に応えたJ.N.ハリスの厚意により、ハリス理化学校（理工学部の前身）の校舎として建築された。1890（明治23）年の竣工で、イギリス積みの煉瓦建築。当初は屋上天文台の塔がつけられていたが、撤去されている。現在は、入試センター、広報課、アドミッションズオフィス、校友課が入っている

<http://www.doshisha.ac.jp/information/facility/buildings/index.php>

力が欠けていたのだと思います。そこで、研修制度を改善することで、研究と修養を身につけた職員を育成できるのではないかと考えているところです。

【平松】なるほど。大学院生活で得られたものは、仕事で何か役に立っていますか。

【藤井】大学院で得られた知識や情報は、それを右から左へと簡単に活用できるものではないと思います。むしろ、大学院で学んだ基本的なものの見方であるとか、アプローチの仕方が身についているかどうかということだと思います。物事を分析するとか、整理するといったことが、政策案や処方箋に結びついてきます。大学院ではそのようなことを身につけることができると思います。知識だけなら大学院に来なくても書籍から得られますが、知識を持っていてもそれを活用できなければ意味がありません。分析や整理がきちんとできるということ、それに基づいて論文を組み立てていけるということが、大学院で議論する中で、私が学んできたのだと感じます。重要なことは、論文を書くために経験した分析する視点や視覚で、現在の仕事をどのように分析し、位置づけ、課題を発見し、公共世界をより良いものにしていくのか、だと思います。すなわち、大学院で得られたことがどのように仕事に役に立つのかではなく、いかにして仕事に役立てていくのかという姿勢が大切なのです。また、大学院で得られたことは、仕事に係わる研究者とネットワークが取れるようになったことですね。情報の交換や、ものの考え方の整理など随分参考にさせて頂きました。これもまた自分の研究や仕事に役立てています。

皆さんへメッセージ

【平松】 それでは、最後に総合政策科学研究科に在籍している皆さん、また、これから総合政

策科学研究科を受験しようと考えている皆さんに向けてメッセージをお願いいたします。

【藤井】 そうですね。まず、「どうして」と思うことがあれば研究してください。そんなに難しくはありません。先ほども言いましたが、自分の家から最寄り駅までの近道を探すこととよく似ていますよ。そうすると研究は面白いです。みんなが知らないことを伝えることができると楽しいじゃないですか。そんな風に考えてみて欲しいです。あとは、大学院生活の中で、長いスパンで研究を考えられるようになることができると思います。自分の研究をいきなり仕事に役立たせることはできません。たとえ良い政策案や処方箋があったとしても現実の壁とか、複雑性のようなものがあって、すぐには実現できません。それでも、長い年月をかけて、変えていく、その働きかけの核になっていったらいいと私は思います。いくら良い案があっても1人では組織は変わりません。まず、みんなが理解してくれること、一緒になって動いてくれる人がいることが必要だと思います。正しいことが正しいと言われるようになるには時間がかかります。そう思って気長に研究に励んでもらいたいですね。

【平松】 どうもありがとうございました。今後のご活躍も楽しみにしております。

募集しています

「私の研究生生活」では、読者のみなさまからのご意見、ご要望、ご感想をお待ちしております。どんなことでも結構ですので下記の連絡先までお寄せください。この企画は読者のみなさまとともに作り上げていくことを目指しています。

「私の研究生生活」企画部 平松寿恵
syoshinnsya@y6.dion.ne.jp